

グループ生産システム農場における PCV2 ワクチンの効果

奥村 華子、呉 克昌

(有)バリューファーム・コンサルティング、茨城県つくば市西大井 1704-3

はじめに

2006 年秋、日本の養豚密集地域において肥育豚での異常に高い事故率が見られた。この高い事故率はサーコウイルス 2 型(以下 PCV2)関連疾病によるものと推察された。

日本では、PCV2 不活化ワクチンは 2008 年 3 月から使用可能となった。今回我々は、野外農場における PCV2 ワクチンの効果について調査した。

材料および方法

調査農場は、東京から南西 100km の養豚密集地域に位置している。母豚規模は 250 頭で、5 グループに分けられた母豚群の子豚を 4 週間に一度離乳する生産方式をとっている(フォー・ファイブ生産システム)。子豚は平均 19 日令で離乳して離乳舎へ移動し、離乳子豚は平均 68 日令で肥育舎へ移動する。それぞれのグループは厳格なオールイン・オールアウトのもと飼養されている。

2007 年 8 月より肥育舎での事故率が増加し、PCV2 が PCR 検査によって検出された(遺伝子型は不明)。この農場では 2008 年 3 月より離乳後の子豚への PCV2 ワクチン(インゲルバック®サーコフレックス)の接種を開始した。ワクチン接種時期

は、2008 年の 3 月中旬から 9 月中旬までは離乳 2 週間後に、9 月中旬以降は離乳時に接種した。そして離乳から出荷までの月ごとの事故率および出荷生体重について、ワクチン接種開始の前後で比較した。事故率は一か月間の離乳から出荷までの全死亡頭数を離乳頭数で割って 100 を乗じた。

結果と考察

ワクチン接種群において、事故率は減少し、出荷生体重は増加した(図1)。2008 年 3 月のワクチン接種開始以前の 1 年間の平均では、事故率は 10.7%、出荷体重は 114.5kg であった。一方、ワクチン接種開始後の 1 年間の平均では、事故率は 5.3%、出荷体重は 115.9kg であった。したがって、ワクチン接種によって事故率は 5.4% 減少し、出荷体重は 1.4kg 増加する結果となった。

本野外調査環境においては、離乳子豚への PCV2 不活化ワクチンの接種が、事故率の低減および出荷生体重の増加に大変効果があることが示された。

図 1. 月ごとの事故率および平均出荷生体重

